

青森県立三本木高等学校

住所 十和田市西五番町七の一

生徒数 男子 五五二名 女子 五七三名

部員数 男子 十一名

顧問 森 康彦

三本木高校空手部は現在、三年生三名、二年生、一年生名四名、計十一名で、校内の部活動の中でも小規模な部活動ですが、他に劣らず、日々練習に励み努力しています。

しかし県内有数の進学校となり、部の中でも遠距離通学者が多く、バス・電車の時刻で、あるいは他の部活との体育館の割り当てで練習時間も制限され、一日の練習時間は二時間ぐらいです。

OBでもあり、現在顧問の森康彦先生は、基本を重視し、その場突きや基本移動に時間をかけ、大会がせまって来た時組手に力を入れるので、普段は基本が練習の中心となっています。型は三高ではやらないのですが、組手の際には引き手などが重要となるので基本移動はみっちりやります。部活で一番辛いのは、やはりこの基本移動だと思います。日曜日や長期休業の時は何往復もやるので一番辛いです。

組手において、三高は攻撃が主体で待ちの組手は極力避けるようにしています。高校空手の主流となっているきざみ逆突きのワン・ツ一の練習には力を入れ、また逆突の飛び込み突きもうちの特徴とも言えるでしょう。

練習内容はとても充実したものがあつたのですが、やはり部員不

足が悩みの種です。団体戦の際どうしても二人二年生が必要となり、その分我々三年生が確実に勝つてポイントをあげなくてはならないので、来年からはもっと部員が入部してほしいです。

部員不足とはいえ、他校との交流は欠かせません。それを補うためにも、遠征や練習試合をし、他校の選手と交流し、過去三年間でも、八工大一、十和田工業、野辺地高校の選手の胸を借りて、人数不足を試合経験で補って来ました。

昨年の大久保威先輩の活躍は目覚ましく、東北大会、インターハイでの先輩の功績は我が空手部の誇りとなるでしょう。しかし、先輩がいなくなつてからも我々は決して弱体化することなく新人戦・春季大会ともベスト8まで進出しました。

これからの三高の課題はもちろん、優勝ではあるが、着実な日々の努力の積み重ねによる技が試合で完全に発揮され、少人数ゆえのアットホームな雰囲気を守らず、そしていざと言ふときの集中力の養成にあるでしょう。徒に勝ち進むのではなく、試合においては、学校で練習して来た技、努力の成就に心がけたい。

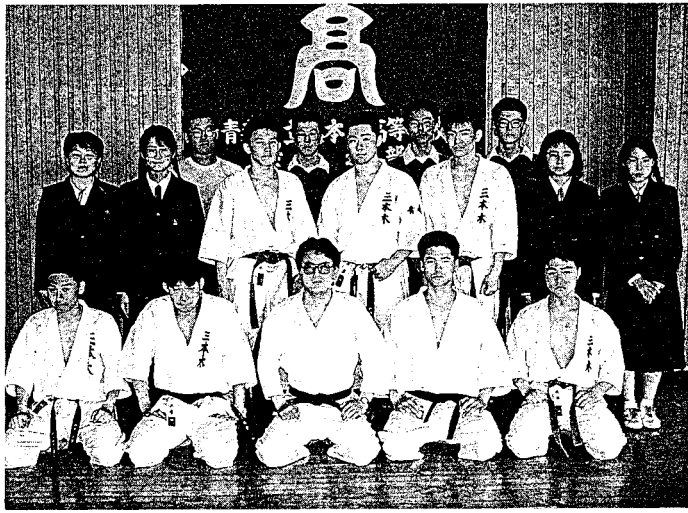
三高空手部は優勝という栄冠は未だ手にしていない。しかし、日々の謙虚でたゆまない努力の継続をすれば、近い将来の三高の優勝も夢ではないだろう。

第十六代部長 森 敏郎

十和田市は、青森県南部地方に位置し、西に車で一時間程のところは観光地として名高い十和田湖がある。本校は、市内の進学校で普通科・理数科を有し、生徒数一二五名の大規模校である。

今年で創立六十五年という歴史のある学校で、校訓を「学業の練磨、人格の陶冶、体力の養成」とし、文武両道をモットーとして
いる。運動面では、卓球部の全国制覇、昨年度の空手道部の全国
選抜個人型優勝を始めとして、多くの部活が東北大会等にも出場
して活躍している。学習面でも毎年国立大進学者百名前後と日
出の勢いである。

さて、空手道部であるが、今年で創部十六年目ということで比
較的歴史は浅い。創部当時の顧問は現在、六戸高校空手道部顧問
の小井川年夫先生である。私は丁度その年に入学し、卒業時にお
ける三期生ということになる。その当時は、県内大会においても



毎年一人位が個人組手で、
上位に入学するかどうかと
いう程度で、大した戦績も
挙げられなかったが、七、
八期生以降にはインターハ
イ上位入賞、東北大会出場、
県大会個人組手上位三名独
占等、そして平成三年には、
型の大久保威の全国選抜優
勝、インターハイ二位、ア
ジア環太平洋ジュニア大会
優勝と目覚ましい戦績を挙
げている。これも、小井川
先生の指導の賜と言えよう。

さて、練習については、先に部長が述べているように、基本重
視で、組手のみ。基本的には型はやらないが、中学校時代に道場
でやってきた者がいれば、その者にはやらせるといった、小井川
先生の意志を今でも引き継いでいる。練習時間は二時間。遠距離
通学者もおり、また部員全員が進学を希望しているので、これが
限界といえる。従って、要は密度である。部員各々がそれを自覚
し、時間通り練習し、小休止を少なくして一生懸命努力すればそ
れ相応の成果は得られると確信している。その結果、やはり練習
不足で勝てなかったということになれば止むを得ないと考えてい
る。

ところで、最近の悩みとしては、どこの学校でもそうなのかも
しれないが、昨今空手道を志す高校生が不足しているように思う
のである。要するに部員不足なのである。顧問を持って三年目
になるが、一度も一個学年で団体戦を組めた例がない。しかも進
学校のため、経験者が入学してくるケースが少ない。結局、素人
が三年間（実質二年間）でどこまでやれるかということになる。
このような状況では団体戦を勝ち進むのは容易ではない。今の若
者には、見た目には派手でも地道な練習の繰り返しであるスポー
ツは合わないのかもしれないかとも思う。しかし、幾度かの栄
冠をバックボーンとして小井川先生の意志を受け継ぎ、伝統を守っ
て、技量だけでなく社会に出て通用する精神的なたくましさをも
につけた部員に育てたいと思うのである。